

選択テーマ：③「Handsome for the Future」(コロナ禍が終息した後、どんな未来を描いていますか)

選択したテーマ番号…③
作品タイトル…今日を抱きしめて生きていく

「コロナが消息したら、どんな世界になるんだろうね。」

おばあちゃんはよく私にそう聞いた。私はうーんと頭をひねるけれど、コロナだって誰も予想が出来なかったことだ。私はその先を予測出来るわけもなく、「どうなるんだろうね。」と返し、そこで会話はぼんやりと終わる。私とおばあちゃんの、いつもの光景であった。何回目かのやり取りを繰り返し返したある日、会話は「どんなことをしたいか。」という内容へと広がった。いつも私に尋ねてばかりのおばあちゃんに、私からも尋ねてみようと思いを開いた。

「おばあちゃんは何？」

おばあちゃんはいつかの私のように口を結んで、うーんと言うと目を細めて笑った。

「あたしはみんなと遠くに行きたいねえ。」

うーんと考えたしぐさ、あれはきつと嘘なんだろうなと思う。ずっとおばあちゃんが抱いていたささやかな願いを、そのとき初めて私は知った。

私はいてもたってもいられなくなって、思わずおばあちゃんの手を引いた。

「散歩、行こう。」

おばあちゃんの願った「遠く」とはかけ離れているけど、今の私にはこれくらいのことしかしてあげられない。少し驚いた顔をした後、「悪いねえ。」と小さく首を縦に振ると、おばあちゃんは、旅行が決まったときのわくわくした子どもみたいな顔で笑った。

近くの神社まで歩いていくと、おばあちゃんはお賽銭箱の前に立ち、手を合わせた。

私も並んで目をつむり、手を合わせた。

「どうか、おばあちゃんの願い事が一日も早く叶いますように。」

うつすらと目を開いてちらりと横目を向ける。視界の端に映ったおばあちゃんは、優しい顔をしていた。

私たちは、少しずつ休憩をはさみながら来た道に戻っていった。

帰路の途中にあるベンチの一つに腰かけおばあちゃんは、はあっと息を吐いた。

「あたしも、いつ死んでもおかしくないからねえ。」

おばあちゃんとはときどき悲しいことを言う。

私のおばあちゃんは昔から謙虚だ。「おばあちゃんを思い浮かべて」と言われたら、私は一歩下がって家族を見守り満足そうに笑うおばあちゃんを思い浮かべるくらいには、控えめで和やかな雰囲気の人である。だから、おばあちゃんの言葉は他の人よりも悲しさを感じさせられることが多い。本人はそんな意図をもっているわけではないことはわかってはいたが、今日の言葉はあまりに直接的すぎて、呟いた言葉に心がきゅっと痛くなった。わたしのおばあちゃんのように、「今日」を抱きしめて生きている人がいる。

どんな人にも時間は限られているということ。

No.A-17

選択テーマ：③「Handsome for the Future」（コロナ禍が終息した後、どんな未来を描いていますか）

明日をどんな風に過ごそう、とはせた思いが、現実となる日。

素晴らしいその日が来ても、特に時間が限られた人がいるということは、忘れてはいけ
ないと思う。

また、コロナ禍が終息しても困った人たちの数が減るわけではない。

正直に、困っている人は全員助ける、なんてことはスーパーヒーローでない限り出来ない。

それでも、自分の中にあるスーパーヒーローの心を無視してしまうことは悲しいことだ。

自分の出来る範囲でいい。

手を差し伸べた人は、必ず、「誰かの大切な人」だ。

私の、あなたの、大切な人を尊重し合える未来がコロナ禍が終息した未来であるよう、私は
そんな未来を描いている。